ポライトネス理論の展開：
ディスコース・ポライトネスという捉え方

宇佐美まゆみ

1　はじめに

Brown & Levinson (1987)が普遍的理論として"politeness theory"（以後，ポライトネス理論"とする）を提唱してから久しい。彼らの理論は，非常に包括的でダイナミックなものであり，この十数年の間に，社会言語学，語用論，社会心理学，会話分析，文化人類学など，様々な関連領域の研究に影響を与えてきた。その一方で，その問題点も様々な視点から指摘されている。

本稿では，彼らの理論の概要を簡単に示すとともに，それに対する主だった批判の妥当性を検討した上で，敬語を有する言語とそうでない言語のポライトネスを同じ枠組で比較検討し，ポライトネス理論をより普遍的なものへと発展させるためには，以下のような発想が必要であることを論じる。

1）敬語を有する言語においては，文レベルにおける言語形式の丁寧度とポライトネスを同一視しないこと。

2）敬語を有する言語と，そうでない言語双方において，ポライトネスは，「文レベル」ではなく，「談話レベル」で捉える必要があること。

3）敬語を有さない言語においても，「社会的慣習に従った言語使用」（敬語を有する言語においては，敬語使用の原則がその大きな比重を占める）がポライトネスに果たす役割にも，より注意を払う必要があること。

4）ポライトネスは，「社会的規範や慣習に従った言語使用」と，「話者個人の方略的な言語使用」の２側面から，またそれらの相互作用の総体として，談話レベルで捉える必要があること。

また，1）～4）の考え方をポライトネス理論に組み込み，それをより普遍的なものに発展させるためには，「ディスコース・ポライトネス」（宇佐美，1997，1998）という概念を導入する必要があることを論じる。

2　Brown & Levinson のポライトネス理論の概観

Brown & Levinson（以後，B＆Lと記す）のポライトネス理論では，「円滑なコミュニケーションを維持するためのストラテジー」としてポライトネスが捉えられている。彼らは，「他者に理解・共感されたいという欲求」としてのポジティブ・フェイス[2]と，「他者に邪魔されたくない，立ち入られたくないという欲求」としてのネガティブ・フェイスの二つを人間の基本的な欲求として立て，この基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することが，ポライトネスであると捉えている。そして，それぞれ，ポジティブ・フェイスに訴えかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス」，ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス」と呼んでいる。また，これらのフェイスを脅かす可能性のある行為をFTA (Face Threatening Acts) と呼び，このＦＴＡの度合いが高くなればなるほど，よりポライトなストラテジーが必要になると捉えている。そして，それを以下のように表している。

$$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$$

Wx : Weightiness of the FTA(x)　　P : Power　　D : Social Distance

Rx : Ranking of imposition(x)　　S : Speaker　　H : Hearer

つまり，ある行為x(FTA)が相手を脅かす度合い(Wx)は，xという行為（例えば，10万円を借りる）が，ある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけると見なされているかという「負担の度合い（R)」と，話し手と聞き手の「社会的距離（D)」(対称的関係)，聞き手の話し手に対する「相対的力（P）」(非対称的関係）の３要素が関数的に働いて決まってくるとしている。また，xという行為が相手にかける負担の度合い（R）は，文化によって異なるとしている。

つまり，B＆Lの枠組みでは，「ポライトネス」は，以上に述べた３要素によって規定される「相手のフェイスを脅かす度合い(Wx)」に応じて使い分けられる，「話者の自発的なストラテジー」として捉えられている。そして，それを以下の５つに分類している。いわゆる「ポライトな」言語行動の分析は，主に以下の②③④が中心となっている。

①伝達意図を明示 (bald on record)：補償行為を行わず，直接的な言語行動をとる。
②伝達意図を明示 (on record)：補償行為を行う―ポジティブ・ポライトネス
③伝達意図を明示 (on record)：補償行為を行う―ネガティブ・ポライトネス
④伝達意図を明示的に表さない。(off record)
⑤ＦＴＡを行わない。

彼らは，これらのストラテジーが選択される状況を以下のような図にまとめている。

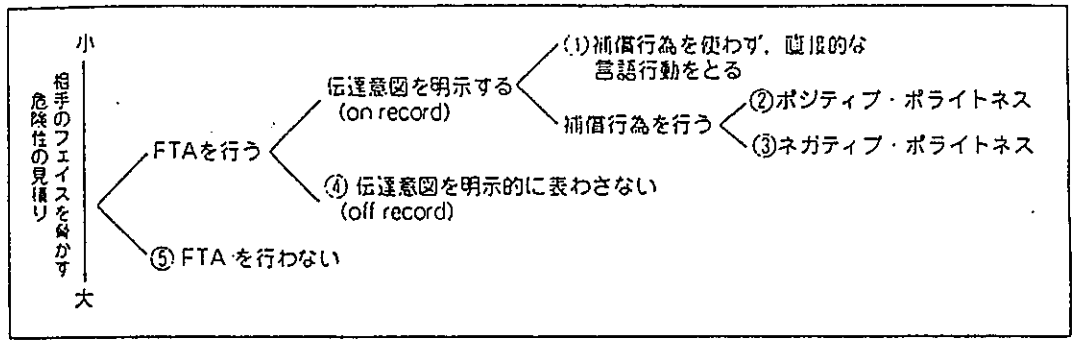

図１　ストラテジーの選択を決定する情況 (B&L (1987): p.60，筆者訳)

つまり，相手のフェイスを脅かす度合いがあまりにも高い場合には，そのＦＴＡを行わないのが最善の策ということになる。ＦＴＡを行う場合は，伝達意図を明示するかしないかに分かれる。ＦＴＡが大きいと思われる場合は，非明示的な「ほのめかす」などの非明示ストラテジー (off record) が取られることが多い。言語で明示する場合 (on record) は，「直接的に言う (bald on record)」場合と，何らかの補償行為(redressive action)を行う場合とに分かれる。この補償行為として，ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとネガティブ・ポライトネス・ストラテジーがあるというわけである。彼らのこの図は，ＦＴＡを行わない場合を除くと，ＦＴＡの見積りがより大きい時は非明示ストラテジーが取られる可能性が高く，ＦＴＡの見積りが小さくなるにつれ，ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー，ＦＴＡの見積りがさらに小さい場合はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが取られやすくなるということを示している。Ｂ＆Ｌは，主に相手に敬意を表したり，礼儀正しさを表すことになる敬語を有する言語における敬語使用は，「その社会の規範に基づいた敬語使用を守ることによって，相手の立場を侵さない」という意味で，基本的には，相手のネガティブ・フェイスを尊重するネガティブ・ポライトネスになっていると捉えている。

彼らの言うように広い意味でポライトネスを捉えるなら，これまでの日本における「いく」「いらっしゃる」「おいでになる」などの言語形式の丁寧度やその相手に応じた使い分けに焦点をあてた膨大な敬語研究は，「既に文法化・語彙化されているネガティブ・ポライトネス」の研究であったと言ってもいいだろう。その他，従来の英語における「丁寧さ」に関する研究でもよく取り上げられてきた「慣用的間接表現」「垣根表現 (hedge)」「名詞化」なども，Ｂ＆Ｌの枠組みで

は，主にネガティブ・ポライトネスのストラテジーとなる。以上の例も含めて，彼らは，ネガティブ・ポライトネスのストラテジーとして10の主要ストラテジーを挙げている。

B＆Lのポライトネス理論の最も斬新な点は，「ポジティブ・ポライトネス」という概念を導入したことである。彼らは「他者に理解・共感されたい，仲間と見なして欲しい」という欲求としてのポジティブ・フェイスに訴えかけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして，15の主要ストラテジーを挙げているが，「冗談を言う」「関心などを誇張して表現する」「ウチ(ingroup)であることを示すマーカーを使う」ことなどがそれに含まれている。「冗談を言える」ということは，既に，相手と文化背景を共有していることを前提として話していることを示しているため，ポジティブ・フェイスに訴えかけていると捉えられるのである。しかし，「冗談を言う」ことを「ポライトだ」とする捉え方は，日本人のみならず，英語話者にも馴染みが深いものではないようで，英語話者の中にも，"politeness"という用語は誤解を生みやすいので，適切ではないのではないかという指摘もある。しかし，一方で，欧米の雑誌などでは，既に何度か"politeness"の特集が組まれ(Multilingua, 8-2/3, 1989; Journal of Pragmatics, Vol. 14, 1990)，また，最近の語用論の概説書(Yule, 1996)にもB＆Lのポライトネス理論が取り上げられており，この概念は，関連領域では既に定着しつつあると言ってもいいだろう。ただ，日本語では，例えば，ポジティブ・ポライトネスを表すために，仲間うちの言葉を使うということは，普通は言語形式の丁寧度を敬体から常体に下げることになる。そのため，その「言語形式の丁寧度が下がる」ということと，言語行動としてポジティブに「ポライトだ」ということとの間にギャップが生じるため，ポジティブ・ポライトネスという発想はなかなか理解されにくいようである。

しかし，B＆Lのポライトネスの捉え方を日本語に応用すると，例えば「行くんですか？」ではなく「行くの？」を使うことは，これまでのように，敬体と常体という言語形式の丁寧度という観点からのみ捉えて，前者の方が丁寧度が高いという見方をするのではないということになる。相手や場面などを考慮して，例えば，「行くんですか？」が知り合ったばかりの同世代の人との会話で使われ，「行くの？」が親しい同世代の友達との会話で使われたとすると，後者は前者に比べ，ネガティブ・ポライトネスの度合いは低いが，ポジティブ・ポライトネスの度合いは高いというように捉えるのである。つまり，そのスピーチレベル（敬体／常体）の選択がそれぞれの場面において適切であれば，どちらも「ポライトネス」を逸しているわけではなく，前者は，ネガティブ・ポライトネスの度合いが高く，後者は，ポジティブ・ポライトネスの度合いが高いと捉えられる。つまり，異なる種類のポライトネス・ストラテジーが用いられているに過ぎないと解釈できるのである。但し，厳密には，このような解釈は，談話レベルの他の要素の働きも考慮に入れて行われる必要がある。

B＆Lは，その他に，話者の意図を明示せず，ほのめかすなどして，解釈を聞き手に委ねるストラテジーを，「非明示ストラテジー(off record)」として立てている。このストラテジーとしては，「比喩を使う」「あいまいにする」「発話を最後まで言い切らない」など，15のストラテジーを挙げている。

3　Brown & Levinsonのポライトネス理論に対する批判の検討とポライトネスに関する近年の研究動向

このB＆Lのポライトネス理論に対しては，主に日本語も含めた敬語体系を有するアジアの言語の観察や分析に基づいて，主に，以下の2点から批判がなされている。

1）B＆Lの言う「フェイス」や「ポライトネス」という概念は，中国語や日本語の「面子」や「礼儀」「丁寧さ」とは異なる(Matsumoto, 1988; Gu, 1990; Mao, 1994)。

2）B＆Lの理論は，個別言語，特に敬語を有する非印欧語の各々に特有の敬語使用の原則を説明しない(Matsumoto, 1989; Ide, 1989; Gu, 1990; Mao, 1994)。

筆者は，1）は，B＆Lの理論や用語を誤解していることからくる批判であると考える。B＆Lの理論では，「フェイス」や「ポライトネス」という概念・用語は，個々の文化の中において意味づけられているものとしてではなく，新しい概念として操作的に定義されているものである。そこに，様々な文化における「フェイス」や「ポライトネス」の内包的意味を持ち出して論じるのは，各文化におけるそれらの意味を知るにはいいかもしれないが，B＆Lのポライトネス理論を検討する際には有効ではない。

2）のタイプの批判には，例えば，次のようなものがある。「日本語においては，FTAがからわっていない場合にも，相手や場面に応じて異なるスピーチレベルの選択が行われている。B＆Lの理論では，以下の例のように同じ命題を述べるときにも，なぜより丁寧な言語形式が選択される場合とそうでない場合があるのかを説明できない。例：a 今日は土曜日だ。b 今日は土曜日です。c 今日は土曜日でございます。」(Matsumoto, 1989)つまり，命題内容が同じなのだから，FTAの度合いは同じはずなのに，或いは，内容的にFTAはないと考えてもよいはずなのに，どうして時によって異なる丁寧度のスピーチレベルが選択されるのかを，B＆Lの理論は説明しないというのである。これは，B＆Lのダイナミックな理論を，部分的にしか捉えていないことから生じる類の批判である。FTAを，命題内容だけから考えているようであるが，そもそも先に示したように，FTAの度合いというものは，$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$で表される3要素から関数的に決まってくるものである。このことを考えると，上の例はB＆Lの理論の枠内で十分説明できる。つまり，例えば，目上の人に対して話すというように，相手の相対的

力（P）が強い場合や，また，初対面の人と話すというように，話し手と聞き手の社会的距離（D）が大きい場合は，おのずとＦＴＡの度合いは高くなり，従ってより丁寧な形式が選択されるというわけである。

また，次のような批判もある。「Ｂ＆Ｌの理論は，考え得るほとんど無限に近い言語表現の中からの，個人の選択としてのストラテジーを基本としている。しかし，日本語の言語形式の丁寧度の選択は，限られた選択肢の中からの選択の問題であり，しかもその選択は，ほとんど語用論的に制約されており，Ｂ＆Ｌが言うように方略的(strategic)に選べるものではない」という指摘(Ide, 1989)である。しかし，日本語の実際の会話における言語使用を見ると，同じ相手との同じ会話においても，敬体から常体へのスピーチレベルシフトが頻繁に起こることが報告されており(Ikuta, 1983)，これらはポライトネスとも密接にかかわっている「方略的言語使用」であることが自然会話の研究から示唆されている（宇佐美，1993b, 1995)。つまり，日本語においても，方略的言語使用がなされていないということはなく，むしろ，日本語のような，文レベルにおいては，敬語使用の原則の制約を受ける度合いの高い敬語を有する言語においてこそ，文レベルよりも制約の少ない「スピーチレベルのシフト操作」などの談話レベルの要素に，ストラテジーとしてのポライトネスが顕著に反映されていると考えることができるのである（宇佐美，1993c；1994 c；1995；Usami, 1993 ; 1995)。

上記のようなＢ＆Ｌの理論に対する批判には，彼らの理論が普遍理論として提唱されているにもかかわらず，未だ西洋中心的思考に偏っている感があるという点など，今後さらに検討されなければならない重要な指摘も含まれている。しかし，基本的には，これらの批判はＢ＆Ｌのポライトネス理論に根本的な修正を迫るものとはなり得ていない。その主な理由は以下の２点である。

1）Ｂ＆Ｌの理論では，むしろ操作的に定義されている「フェイス」や「ポライトネス」という新しい概念を，個々の文化に固有の社会・文化的概念と混同していること。

2）敬語を有する言語における「ポライトネス」を，文レベルにおける言語形式の「丁寧度」の選択の原則，すなわち，「敬語使用の原則」と同一視していること。

Ｂ＆Ｌのポライトネス理論は，様々な文化における敬語使用の原則は相対的なものであるということは当然の前提とした上で，そういう文化的相違もパラメーターに含めて提唱されたものである。未だ修正の必要性はあるものの，ポライトネスの普遍理論を構築しようというアプローチに，文化に固有の概念や，個別言語において，主要ではあるが，ポライトネスの一部を担っているにすぎない「敬語使用の原則」を持ち出して，彼らの理論を批判することは，むしろ普遍理論の構築に逆行するものである。

ただ，Ｂ＆Ｌの理論が，主に敬語を有する言語の研究者から，その敬語使用の原則を説明しないという批判を受けるのは，基本的に彼らの理論が，一文，一発話行為レベルの方略的言語使用

に重きを置いたものになっているためであると思われる。ポライトネスを文レベルで捉えると，敬語を有する言語においては，どうしても敬語使用の原則の制約の比重が重くならざるを得ないからである。「言語使用」に焦点を当てたポライトネスの普遍理論が，各個別言語において既に文法化，語彙化されている敬語使用の原則をすべて説明する必要はない。しかし，確かに現状のＢ＆Ｌの理論は，敬語を有する言語における敬語使用の原則が個人の方略的な言語使用に対して持つ制約力の影響を，また，敬語を有さない言語においても存在する「言語使用の社会的規範や慣習」が個人の言語ストラテジーに与える制約的影響を，その理論に十分に組み込んでいないと言える。そういう意味で，現状のＢ＆Ｌの理論には限界があると言わざるを得ない。

Ｂ＆Ｌの理論が提出された直後には，以上に簡単にまとめたように，主に，非印欧語の研究者から，彼らの理論が西洋中心的な思考に基づいているとの批判が出された。主に，英語圏の雑誌に発表された日本人研究者の論文にも，日本語の敬語使用の原則に基づいた例をあげ，Ｂ＆Ｌの理論が日本語には当てはまらないことを指摘するものが多かった。しかし，最近は，日本でもポライトネス理論が知られるようになり，この理論に絡めて日本語の分析を行ったものが出てきており，それらの中には，基本的にはＢ＆Ｌの理論を支持するものが増えてきている（筧川，1994；山口，1995；三牧，1997)。ただ，これらの研究には，限定された発話行為をデータとして，そのデータの解釈にＢ＆Ｌの理論が適用可能か否かというように，複合的要素から成るＢ＆Ｌの理論の一部を，特定のデータに当てはめて部分的に検証しようとしたものが多く，Ｂ＆Ｌの理論の枠組み全体を検証し，修正・発展させようとする試みはほとんどなされていない。

筆者は，Ｂ＆Ｌの「基本的」枠組みは支持した上で，先に概観したような，Ｂ＆Ｌの理論の限界を補い，この理論をより多くの言語に適用しうる普遍的なものにするためは，ポライトネスを文レベル，一発話行為レベルで扱うことは不適切であり，「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入し，この理論を「ポライトネスの談話理論」とでも言うべきものへと発展させる必要があると考えている。

4　「ディスコース・ポライトネス」という概念

ポライトネスの理論をより普遍的なものへと発展させるためには，敬語を有する言語のそれぞれ異なる敬語使用の原則を越えてある，「円滑なコミュニケーション」のための言語的ストラテジーの原則を，敬語を有さない言語のそれも含めて，公平に同じ枠組で論じられるようにしなければならない。そのためには，以下の点を認識する必要がある。

1）各言語の構造の違いが大きく影響する文レベルにおける言語表現の比較は不適当である。

2）敬語を有する言語においては，従来のように，文レベルにおける「言語形式の丁寧度」だけの問題としてポライトネスを捉えるという発想を転換し，実際の言語使用における「談話レベル」の語用論的ポライトネスという視点からポライトネスを捉える必要がある。

3）敬語を有さない言語においては，敬語使用の原則による語用論的制約に相当するような「社会的規範や慣習に従った言語使用」にも，もっと注目する必要がある。

4）敬語を有する言語，そうでない言語双方において，ポライトネスは，「社会的規範や慣習に従った言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」の2つの側面から，また，それらの相互作用も考慮して，談話レベルで捉えていく必要がある。

以上のような認識に基づいて，筆者は，語用論的ポライトネスにも重要な働きをしていると思われ，また，構造の異なる言語間の比較もしやすい「話題導入頻度の多少」，「前置きの有無」，「あいづちの頻度」等々の談話レベルからしか捉えられない諸要素の影響をポライトネスの要素として捉える「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入した（宇佐美，1996b；1997；1998；Usami, 1996）。

ここでは，「ディスコース・ポライトネス」を以下のように定義しておく。「ディスコース・ポライトネスとは，一文レベル，一発話行為レベルでは捉えることのできない，より長い談話レベルにおける　要素，　　，及び，文レベルの要素も含めた諸要素が語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である。」

ディスコース・ポライトネスは，語用論的ポライトネスの一種であるが，語用論的ポライトネスは，一文，一発話行為レベルでも捉えることができるという意味で，この両者は同一のものではない。ディスコース・ポライトネスは，談話レベルでしか捉えられない語用論的ポライトネスであると言えよう。また，「ディスコース・ポライトネス」は，日本語などの敬語を有する言語も，英語のような敬語を有さない言語も同様に，「社会的規範や慣習に従った言語使用」と，「話者個人の方略的な言語使用」という2つの側面から，また，それらの相互作用という観点から捉えていく必要がある。

5　ディスコース・ポライトネスにかかわる研究

以上のような「ディスコース・ポライトネス」という観点から見ると，日本語におけるディスコース・ポライトネスにかかわる要素として，以下のようなものが挙げられる。「言語形式の丁寧度」の他に，前述の「スピーチレベルシフト」，「話題導入頻度」，「あいづちの頻度」（宇佐美，1993a），「前置きの有無」（柏崎，1995），「中途終了型発話」（宇佐美，1994c），「いわゆる終助詞

「ね」の場面による使い分け」（宇佐美，1994b；1997），「「ね」の適切な使用頻度」（宇佐美，1997）などが挙げられる。このうち，「あいづちの頻度」と「「ね」の使用頻度」は，「話題導入頻度」という談話レベルからしか捉えられない，ある要素の「適切な使用頻度」を同定していくことによって，その頻度とポライトネスの関係を明らかにしていこうとする方向とかかわるものである。これまであまり論じられたことがないが，ディスコース・ポライトネスに重要な役割を果たしているものと考えられ，今後の研究の発展が望まれる。

以下に，ディスコース・ポライトネスにかかわる研究をより具体的に見ていく。例えば，宇佐美(1993b)は，日本文化においては相手の年齢が，B＆Lの公式のP（相対的力）の指標になると仮定し，ベースの被験者が，初対面同性の「目上」「同等」「目下」の相手と会話を行うという実験計画のもと，ベースの言語行動が相手の「相対的力」に応じていかに変容するかを分析した。B＆Lの理論の予測にのると，相手の「相対的力」が大きいほどFTAの度合いが高くなるので，目上に対して，よりポライトな言語行動が行われることになる。この「よりポライトな」を，「文レベルの言語形式の丁寧度が高い」ことであると捉えると，彼らの予測は当たらないことになる。というのは，結果は，文レベルの敬語使用の頻度を見ると，ベースは相手の「相対的力」にかかわらず約80%を「敬体」で話していたからである。これは，「上・下」よりも「内・外」によってスピーチレベルを使い分けるという現在の日本語の敬語使用の原則を考えると当然とも言えるだろう。しかし，談話レベルの要素として「話題導入頻度」を分析してみると，ベースの話題導入頻度は，「対目上＞対同等」「対目下」の順に頻度が高くなっていた。このことから，日本語における初対面の会話の場合，言語形式の丁寧度は，対話相手の相対的力を指標しないが，「目上のものが話題を導入し，会話を進めることが適切である」，逆に言うと，「初対面の目上の相手に対して，目下のものが話題を導入していくことは失礼になる」という考えが，「話題導入頻度」の差となって，言語行動に反映されていると考えられることが示唆された。事実，フォローアップ・アンケートにそのように記述していたものもある。このような結果から，初対面の会話では，言語形式の丁寧度よりもむしろ，「話題導入頻度」という談話レベルの要素のほうが，相手に応じた「ポライトネス」を反映していると考えた。また，「敬体」から「常体」へのスピーチレベルシフト（ダウンシフト）も，相手の年齢が下がるにつれて多くなるという結果も得られた。これらの結果は，B＆Lの理論の予測と一致することから，B＆Lの理論は，敬語を有する言語においては，むしろ文レベルの敬語使用よりも，談話レベルの要素にこそ当てはまるのではないかという仮説を立てたわけである（宇佐美，1993c）。

また，「話題導入」に関連させて「中途終了型発話」がポライトネスに果たす役割を分析した研究（宇佐美，1994c）では，目下の者が話題を導入する時に「中途終了型発話」を多く用いていることから，「中途終了型発話」は，日本語においては，FTAが高い行為を行うときに，それを補

終助詞も，その大きな要素の一つである。宇佐美(1997)では，終助詞「ね」を，その本質的意味，内在的意味（益岡，1991）からではなく，益岡（1991）の言う「表現効果」，すなわち，実際の会話の中における「連用上の機能」という観点から5つに分類し，同一話者が，「会議」「昼食時雑談」という2つの異なる場面で，異なるコミュニケーション機能を持つ「ね」をいかに使い分けているかを，ディスコース・ポライトネスの観点から分析した。その結果，会議場面では，「ね」の約90%が，ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能しており，一方，雑談場面では，「ね」のほとんどがポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能していることが明らかになった。つまり，会議場面では，言語形式が敬体中心であるばかりでなく，「ね」も，ネガティブ・ポライトネスを保つ働きをしており，一方，雑談場面では，言語形式も常体が多い上に，「ね」もポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能していたのである。

これらの結果から，同じ日本語の言語使用においても，相手や場面に応じた特定の「ディスコース」の性質によって，ポジティブ・ポライトネスが重視されるかネガティブ・ポライトネスが重視されるかが著しく異なっていること，また，一つの言語形式「ね」が，場面によって，その「ディスコース・ポライトネス」に異なる役割を果たしていることなどが明らかになった。

6　おわりに

以上，文レベルの言語形式の丁寧度の選択に語用論的制約がある敬語を有する言語と，話者の自発的ストラテジーの比重が大きい敬語を有さない言語における言語使用の「ポライトネス」を同じ枠組で比較し，その普遍的特性を追究するためには，B&Lのポライトネス理論に，ディスコース・ポライトネスという概念を導入し，それを「ポライトネスの談話理論」へと発展させる必要があるということを論じた。一般に，アメリカはポジティブ・ポライトネス社会，日本はネガティブ・ポライトネス社会であるということが言われてきた。しかし，現代の日本語の自然会話を分析していると，多くの話者はそれと気づかずに様々なポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いていることが分かる。確かに，日本語には敬語使用の原則の語用論的制約があるため，社会人の改まった場面の会話における「スピーチレベルの選択」には，個人の自発的ストラテジーが入り込む余地はあまりない。人は，「社会的規範・慣習にのっとった言語使用」を行うことによって，互いのネガティブ・フェイスを尊重するのである。しかし，それだからこそ，相手に近づきたいという個人の素直な気持ちを表したり，相手のポジティブ・フェイスに訴えかけるためには，敬語に代表されるような言語形式以外の何らかの言語ストラテジーを使わないわけにはいかないのである。それが「スピーチレベルのシフト操作」であり，また，「あいづち」であ

低するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーにもなっていることを示唆した。

これらの結果から，言語行動の諸要素の中には，B&Lの理論で言う「相対的力（P）」がより顕著に反映されるもの，「社会的距離（D）」が顕著に反映されるもの，「相手にかける負担の度合いを示す場面や状況（R）」が優先的に指標されるものがあり，それぞれの要素がそれぞれの役割を果たしていることが明らかになった。つまり，これまで扱ったものの中では，「話題導入頻度」は，話者間の「相対的力関係（P）」を指標し，「スピーチレベルシフト」は，冗談を言うなどの発話の内容に応じて，談話内におけるローカルな「心理的距離」を操作するのに用いられ，「言語形式としてのスピーチレベル（敬体／常体）」自体は，「初対面の相手との会話では，基本的には敬体を使う」などの，その談話の場面や状況（R）を主に指標していると考えられる。このように考えると，日本語においても，従来の敬語研究のように「言語形式の丁寧度」のみを扱っていたのでは，B&Lの理論が志向した「言語使用が生み出す実質的な機能としてのポライトネス」は捉えられないことがわかるだろう。つまり，ある特定の談話のポライトネスは，上記のような諸要素の機能の総体として捉えられる必要があるのである。

以上のような結果や考察を通して，先に定義した「ディスコース・ポライトネス」という概念が必要であると考えるに至った。つまり，あるまとまりを持った「会話」などにおける，人間の相互作用に重点を置いた実質的機能としてのポライトネスは，文レベルにおける言語形式の丁寧度からだけではなく，談話レベルでしか捉えられないその他の諸要素がポライトネスに果たす役割のダイナミクスの総体としての「ディスコース・ポライトネス」として捉えられる必要があるということである。上の初対面二者間会話の例では，全発話の約80%を占める「敬体」という言語形式の使用は，相手の相対的力の大小にかかわりなく，初対面という場面に適した敬語使用の原則を守っているということにおいて，ネガティブ・ポライトネスとなっている。一方，「話題導入頻度」の結果は，現在の敬語使用の原則には顕著には表れない，話者間の「相対的力」を反映している。つまり，目上への（相対的力が強い者への）配慮を示していると考えられる。また，「敬体」使用が規範であるディスコースにおいて，敬体から常体へダウンシフトするというスピーチレベルのシフト操作は，相手に対する親しみや共感を表すというポジティブ・ポライトネス・ストラテジーになっている。つまり，日本語においては，基本的スピーチレベル（言語形式）を適切に選択することで，ネガティブ・ポライトネスを保った上で，相手に共感を示す内容の発話をするなど，そのディスコースのローカルな要因に応じて，スピーチレベルを基本レベルから逸脱させること（この例では，ダウンシフト）が，一つの「自発的な」ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーになっているのである。この会話全体のディスコース・ポライトネスは，これらの総体として捉えられるということである。

これらの他にもディスコース・ポライトネスの要素には，様々なものが考えられる。いわゆる

り，「終助詞の使用」なのである。

今後は，まず，日本語と英語において，ディスコース・ポライトネスを構成する主な要素が何であるかを同定し，比較検討したい。ディスコース・ポライトネスの要素は，当然，各々の言語によって異なる。故に，様々な言語・文化におけるディスコース・ポライトネスを構成する諸要素を比較検討することは，様々な言語・文化の相対性を再考することにもつながる。しかし，同時に，それら諸要素がディスコース・ポライトネスに果たしている役割の関数的関係を明らかにしていくことによって，「ポライトネスの談話理論」を模索していくことができるのではないかと考えている。ポライトネスの表現方法は，各々の言語・文化によって異なる。しかし，各々の言語・文化によって異なる諸要素（言語形式，語彙，スピーチレベルのシフト操作等）が，ポジティブ・ポライトネス，ネガティブ・ポライトネスという「機能」を生み出し，それらが「ディスコース・ポライトネス」を形作っているという，そのダイナミクスには何らかの普遍性があるのではないかと考えるからである。

注

1）Brown & Levinsonの"politeness theory"における"politeness"の専門用語としての意味は，英語においても一般的な意味とは異なるものである。また，日本語においても，「丁寧さ」と訳すと「言語形式の丁寧度」と混同されやすく，B＆Lの言う"politeness"の正確な概念を表しているとは言い難い。そのため，筆者はこれまで，"politeness"と原文で表記することによって，それがBrown & Levinsonの"politeness"の概念を指すことを示してきた。しかし，最近，日本においても，Brown & Levinsonの理論が知られるようになり，片仮名表記もよく使われるようになったことを鑑み，本稿では，「ポライトネス」と表すことにした。以後，「ポライトネス」と表記した場合は，Brown & Levinsonの"politeness theory"における"politeness"の概念を示すことを断っておく。

2）「フェイス」については，「面子」，「面目」などと訳されることが多かったが，それらの訳語が，本稿3でも論じているように，B＆Lの言う操作的に定義された「フェイス」を，「文化に固有の概念」と混同して捉える傾向を強めているように思われるので，ここでは，あえて「フェイス」を用いることにする。「ポジティブ」「ネガティブ」という用語についても，これまで「肯定的」「消極的」という訳語が使われることが多かったが，その訳語のニュアンスが，B＆Lが定義した意味を不明確にしている場合も多いように思われるため，ここでは，原語を片仮名表記することにした。読みづらい面もあるかもしれないことを，断っておく。

3）この「相対的力」（"power"）は，あくまで当該の状況において，聞き手が話し手に対して持つ「相対的力」を指すものであり，「権力」「勢力」などのような社会学的に規定される概念ではない。この点に関しても，誤解が多いようなので，注記しておく。より詳しい説明は，Brown & Levinson (1987)，宇佐美(1994c)などを参照されたい。

4）Brown & Levinsonのポライトネス理論の枠組みでは，「心理的距離」の捉え方は，明確にされていない。未だ検討の必要性がある部分である。

引用文献

＝日本語文献＝

宇佐美まゆみ（1993a）「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の力関係による相違ー日本語の場合」，ヒューマン・コミュニケーション研究，日本コミュニケーション学会，第21号，25-39.

＿＿＿＿（1993b）「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析：対話相手に応じた使い分けという観点から」，学苑　647，昭和女子大学近代文化研究所，37-47.

＿＿＿＿（1993c）「談話レベルから見た"politeness　"：＂politeness theory"の普遍理論確立のために」，ことば，現代日本語研究会，14号，20-29.

＿＿＿＿（1994a）「言語行動における"politeness"の日米比較」，スピーチ・コミュニケーション教育（日本コミュニケーション学会），30-41.

＿＿＿＿（1994b）「場面に応じた「ね」の使い分け」，『職場における女性の話しことば』（東京女性財団，1993年度助成研究報告書），51-60.

＿＿＿＿（1994c）「性差か力（power）の差か：初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より」，ことば（現代日本語研究会），15号，53-69.

＿＿＿＿（1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」，学苑　第662号，昭和女子大学近代文化研究所，27-42.

＿＿＿＿（1996a）「初対面二者間会話における話題導入頻度と対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について」，ことば，現代日本語研究会，17号，44-57.

＿＿＿＿（1996b）「ポライトネスの談話理論構築に向けて」，日本プラグマティックス学会1996年度年次大会配布資料

＿＿＿＿（1997）「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば：職場編』（現代日本語研究会編），241-268，ひつじ書房.

＿＿＿＿（1998）「初対面二者間会話における『ディスコース・ポライトネス』」，ヒューマン・コミュニ

ケーション研究．(日本コミュニケーション学会)．
宇佐美まゆみ・細田明美（1995）．「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン：初対面二者間の会話分析より」，日本語学・日本語教育論集，第２号．名古屋学院大学留学生別科．130-145．
柏崎秀子（1995）「談話レベルで捉える丁寧さ」『日本文化研究所紀要』第１号
植川洋子（1994）「異文化間に見られる「丁寧さのルール」の比較」『異文化間教育８』（異文化間教育学会），44-58．
岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
三牧陽子（1997）「対談におけるＦＴＡ補償ストラテジー」『大阪大学留学生センター研究論集：多文化社会と留学生交流』創刊号，59-78．
山口登子（1995）「討論における否定的評価のポライトネスストラテジー」『日本語と日本研究』，336-350．

＝英語文献＝

Brown, P and Levinson, S. (1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge University Press.

Gu, Y. (1990) Politeness phenomena in modern Chinese. Journal of pragmatics 14, 237-257.

Ide, S. (1989). Formal forms and discerment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. Multilingua 8, 223-248.

Ikuta, s. (1983) Speech level shift and Japanese conversational strategy. Language sciences.

Mao, L. R. (1994) Beyond politeness theory: 'face' revisited and renewed. Journal of Pragmatics 21, 451-486.

Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face. Journal of pragmatics 12, 403-426.

Matsumoto, Y. (1989). Politeness and conversational universals: observations from Japanese. Multilingua 8, 207-221.

Usami, M. (1993) Politeness in Japanese dyadic conversations between unacquainted people: Influence of power asymmetry. Paper presented at the 10th World Congress of Applied Linguistics. Amsterdam, Netherland.

Usami, M. (1994) Politeness and Japanese conversational strategies: Implications for the teaching of Japanese. Qualifying paper submitted to Harvard University, Graduate School of Education.

Usami, M. (1995) Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness. Doctoral dissertation proposal submitted to Harvard University, Graduate School of Education.

Usami, M. (1996) Discourse politeness in Japanese conversation: From the results of speech-level shifts and topic management strategies. Paper presented at the 11th World Congress of Applied Linguistics, Jyväskylä, Finland.

（うさみ　まゆみ）

宇佐美まゆみ(1998)「ポライトネス理論の展開: ディスコース・ポライトネスという捉え方」
東京外国語大学日本課程編『日本研究教育年報 (1997年度版)』、
東京外国語大学日本課程: 145-159. 15頁. 1998年8月.